慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本橋八重洲1丁目街並み商業史覚書
Sub Title	Historical Study of Commerce of Downtown in Tokyo : Case of Yaesu-1 chome, Nihonbashi
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	
Publication year	2001
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.44, No.2 (2001. 6) ,p.37-
JaLC DOI	
Abstract	本稿はこれまで本誌に記してきた日本橋の町々に続いて,かなり史的に特徴をもつ現在の八重洲1丁目,以前の西河岸町・ 呉服町・ 元大工町・ 数寄屋町・ 檜物町・ 上槇町の6つの町-江戸時代には呉服橋御門外の西の一郭-について,その街並みを商業史の視点から取りあげるものである。江戸時代初期,特に江戸城造成の頃は,この一郭は騒然たる建築資材などの荷揚げ場であったが,この完成と大名屋敷ができあがるにつれ,ここに町屋が形成され,多くの御用達商人が屋敷を拝領するなどして移り住み,また国役の職人が集団居住するに至る。しかし,江戸市中
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20010600-00686171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第44巻第2号
2001年 6 月

2001年 3 月21日掲載承認

日本橋八重洲1丁目街並み商業史覚書

白 石 孝

＜要　約＞

本稿はこれまで本誌に記してきた日本橋の町々に続いて，かなり史的に特徴をもつ現在の八重洲1丁目，以前の西河岸町・呉服町・元大工町・数寄屋町・檜物町・上槇町の6つの町――江戸時代には呉服橋御門外の西の一郭――について，その街並みを商業史の視点から取りあげるものである。

江戸時代初期，特に江戸城造成の頃は，この一郭は騒然たる建築資材などの荷揚げ場であったが，この完成と大名屋敷ができあがるにつれ，ここに町屋が形成され，多くの御用達商人が屋敷を拝領するなどして移り住み，また国役の職人が集団居住するに至る。しかし，江戸市中が拡大するにつれ，これら職人は国役よりはるかに割のよい顧客を求めて，様々な町に分散してゆき，町の様相は次第に変わって，元禄の頃になると，上方文化の東漸を象徴するように，多くの工芸師の住む町となる。本稿はここにどのような工芸師たちが住んでいたかを表示し，そこに，この町の他の町とは違った史的特徴を見出す。

江戸後期に，この町は市中の町々と同じような諸問屋のある町屋となるが，明治維新後，ここは，他の日本橋の町々とはまた異なった外的環境の変化に遭遇するのであった。本稿はこれを明治・大正期の街並み変貌として詳述する。まず時代の流れの中で，新政府の欧化都市計画や外濠内にあった大名屋敷の消失と，その跡地の荒廃に触れ，更に大正期に，鉄道がひかれても，東京駅の乗降口は丸の内側のみであったことから，この界隈はいわば，新しい時代の発展センターの丸の内地区とは，鉄道と外濠により二重に分断されるという重大な背景を指摘して，大正7年におけるこの町々の店の業種を表示する。そこでは「魚河岸の外郭地」としての色彩が呉服町にあったこと，大戦景気を背景として急増した芸妓屋や待合が，特に数寄屋町・檜物町・上槇町の街並みを特徴づけたことを表示すると共に，他方，これらの町に，明治の産業勃興と関係の深い諸会社が数多くみられるといったことを詳述する。そして，明治・大正期のこの界隈は，下町的様相とこうした近代的な諸会社のある町の姿とが奇妙なコントラストを持ちつつ混在するという特徴を持つことを指摘する。

更にこの界隈の特徴を，土地の所有者からみ，どのような業種の地主が多かったか，またそれはどのような地主であったかを明らかにして，改めて，この界隈の大正初期の商業的価値を考え，それぞれの町の平均地価からまた人口の増加率からその特性を描き出すものである。

＜キーワード＞

慶長江戸図，武州豊島郡江戸庄図，船入堀，河岸町，呉服橋御門外，国役請負，集団居住，城下町，畳刺人別帳，江戸惣鹿子，拝領屋敷，幕府御用達工芸師，江戸・町づくし稿，道寿屋敷・三島

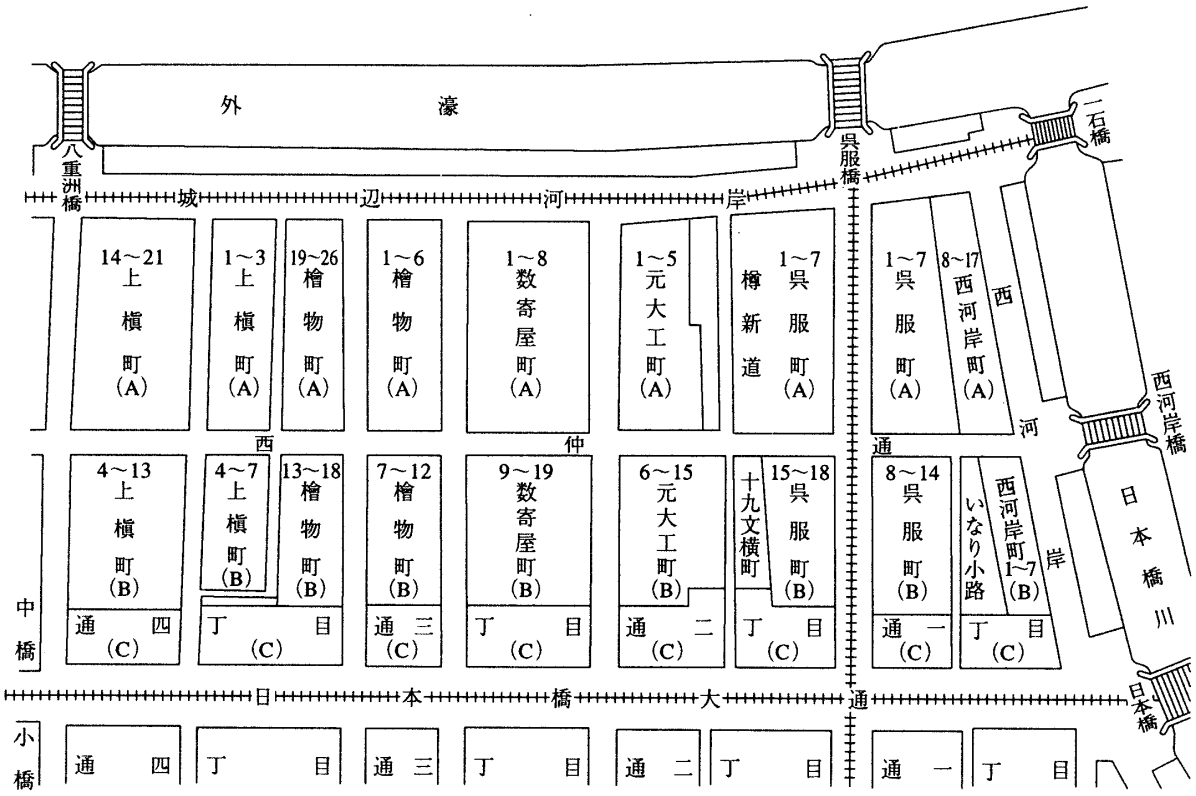
屋敷，会所屋敷，欧化都市計画，官庁集中計画，東京市区改正条例，商業価値，殖産事業進展センター，電気鉄道，帝都復興区画整理誌，魚河岸の外郭地，魚問屋，日本橋芸妓，花柳街，大戦景気，普通銀行条例，生命保険会社，台湾製糖，地籍台帳，質商の資産形成，主要地主の職業，大資産家リスト，町の平均地価，町の人口増加率比較，下町的様相と丸の内的様相の混在

1．はしがき

本稿は江戸時代は「呉服橋御門外」といわれた地区の西の部分，現在の八重洲１丁目界隈の街並み商業史である。

これまで，筆者は『日本橋街並み商業史』の著書以後，主として，浜町川堀以東の地区の町々について，本誌に，その街並みの史的特徴を記してきたが，[1] ここでは更に，日本橋南の町々に眼を転じ，まず，江戸時代から明治・大正にかけてあった古い町々，西河岸町・呉服町・元大工町・数寄屋町・檜物町・上槇町を取りあげることとした。

図１　呉服橋御門外西の部略図（数字は地番）　　江戸・明治・大正



1)　白石孝「日本橋橘町商業史覚書」三田商学研究41の６，「日本橋村松町・久松町商業史覚書」同誌43の２，「日本橋浜町１丁目街並み商業史覚書」同誌43の４，「日本橋浜町２・３丁目商業史覚書」同誌43の５。

図１はこの町々の略図である。これには，各ブロック毎に町内地番を，そして，西仲通りから外濠までの西側の部分を（A）とし，東側を（B）として，またこれに隣接している通町を（C）と記しておいた。何故ならば，これらの町々が震災後にその範囲と町の名を変化させて今日に至っているからである。震災後の復興では，まず，その西仲通り以東の（B）の部分が，通町の方に編入され，この６つの町々は，呉服橋１丁目，２丁目，３丁目になり，戦後には，八重洲という名がこの界隈の町名となって，八重洲１丁目，２丁目，３丁目と替わったが，現在では，さきに通町の方に編入された（B）の部分や，中央通り（日本橋大通り）までの旧通町の（C）の部分を新たにつけ加え，１つの町にくくられて，八重洲１丁目となるのであった。

これをみても，これまで扱ってきた日本橋の他の町々とは，かなりその史的様相を異にするが，その街並みの変遷をたどると，そこに多くの特徴を見出すことができる。以下は，これまであまり長期的に考察されてこなかった，この町々について，慶長年間の江戸城築城期における町の形成から，江戸後期における商業地としての姿をみ，更に，明治・大正期の町々の変貌とその背景に及び，その史的特徴を動態的に明らかにしようとするものである。

2．江戸時代の街並みの変遷と特徴

この町々の形成期の姿は，「慶長江戸図」（慶長13年）や「武州豊島郡江戸庄図」（寛永江戸図）のように，東に楓川，西に外濠，南に楓川から外濠までの入堀（後の中橋広小路），北には日本橋川という四面が水路に囲まれた一郭にあった。そして，東の楓川からは櫛形の船入堀が造られ，江戸城の築城のための必要な石材などの運搬荷揚場をなしていたし，[2] 慶長期では外濠の八重洲河岸が大土木工事現場の中心をなしていた。そして，まだ城郭内には，築城に従事する武士・町人・職人などが共に居住していたし，その後，外濠内に武家屋敷地ができても，慶長江戸図にあるように，堀に沿ったあたりには町屋があり，家臣団の生活資糧や武家の旅宿のような商いがなされてもいた。[3] この頃の呉服橋界隈の地区は，前述のような荷揚場の一郭として，騒然たる河岸町の集まりといってよかったのではなかろうか。それに，外濠にかかっている呉服橋にしろ，「慶長年間江戸図考」によれば，[4] 橋の名がつけられても，まだ公のものとして印すこともなかったという。

しかし，江戸城築城もほぼできあがり，大名屋敷も拡張されるに及んで，町屋は次第に，外濠の外に移転されることとなる。「呉服橋御門外」西の部の町々の形成である。特に，寛永期に，外様・譜代の参勤交代布令によって，この町々に御用達商人などの屋敷地が与えられる。そして，それらは「武州豊島郡江戸庄図」にみるように，町屋には属さぬ屋敷地として扱われるのであった。

2）鈴木理生「江戸の都市計画」（小木新造編『江戸東京を読む』p.36）
3）水江漣子『江戸市中形成史の研究』p.96
4）「慶長年間江戸図考」（『燕石十種第３』p.303）

公儀呉服所の後藤縫殿助，同じく三島屋祐徳の屋敷や御用達畳師伊阿弥などのそれもこの例である。

同時に，この界隈の町には多くの国役請負・職人が集中して居住するに至る。この集団居住こそ，この町々の江戸初期における史的特徴の1つといわなくてはならない。そこで，「呉服橋御門外」の一郭は大きく異なった色彩を持つ東西の町に分たれる。東側にあった入堀河岸は，築城のための建築資材の荷揚場から，大名屋敷御用達や拡大した市中の町屋の需要に応ずる物資の集散の問屋の荷揚場に替わり，東海道となった通町筋の西側に，多くの問屋が店を並べ，西側の町々は，前述のような国役請負・職人などの多い界隈となるのであった。三浦俊明のいう「城下町」の性格を示した一郭になったといってよかろう。[5)]

筆者が『日本橋街並み商業史』で記した前述の御用達畳師伊阿弥なども，呉服町に屋敷を拝領し，多くの畳刺し職人を，この町に住まわせた典型的な例である。

この伊阿弥家は，家康の上意により，京都の畳刺し職人30人を召し連れて，江戸城の畳御用をつとめるが，最初は外濠の八重洲河岸に屋敷を拝領して，後に呉服町に屋敷替えをさせられるが，町に畳刺し職人を集団居住させ，国役に応ぜしめたのであった。[6)] もちろん，幕府御用は江戸城であるが，そのほか日光東照宮，久能山東照宮，芝増上寺，上野寛永寺廟，徳川御三家の畳修覆であったが，職人は国役だけでは生活ができず，江戸市中が整うにつれ，この需要を対象とするに至り，次第に集団居住から各町へと分散してゆく。実際，職人の国役負担は，享保年間には1ヶ年437人，その他，表店1軒につき年間20人ほどで，合計1年9,000人にのぼり，職人にとってはかなりの負担といわなければならなかった。それだけに，職人はこの国役を嫌い，幕府の作成する「畳刺人別帳」にも登録せず，様々な町へと散っていった。まさに「集団居住」から「分散居住」への変化である。[7)] この傾向は，他の業種についてもいえるが，特に明暦の大火以後には，もはやこの町は職人町としての色彩を失うのであった。

とはいえ，この町々に，御用達の商人や諸工芸師が多く住んでいたことは事実である。表1は「日本史資料総覧」や「江戸惣鹿子」より作成したリストである。ただ「江戸惣鹿子」は，周知のように，元禄期であるけれども[8)]「日本史資料総覧」の方は時代が明記されていないので，同一の表にこの両者を一緒に示すのは，資料として問題があるかも知れないが，それでも，こうした商家が居住あるいは店を持っていたことは，これまでの町史にも記されていないので，この町々の史的特徴を示すものとして注目されるのではあるまいか。

このように，呉服町には，すでに述べた御畳方・伊阿弥宗順がおり，また明治5年に数寄屋町に編入される外濠河岸近くに公儀呉服所の三島屋祐徳の拝領屋敷があり，檜物町には同じ呉服所の茶

5) 三浦俊明「江戸城下町の成立過程」(『日本歴史』172号，p.99)
6) 江戸科学古典叢書18『備後国畳表蘭農業之図』及び白石孝『日本橋街並み商業史』pp.20-21.
7) 乾広己『江戸の職人』p.86
8) 「江戸惣鹿子名所大全」(『江戸叢書』巻の4)

表１　御用達商人諸芸諸師

町名	職名	姓名	町名	職名	姓名
呉服町	塗・御蒔絵師	服部清右衛門	檜物町	御呉服所	茶屋長意
	〃	分銅屋忠左衛門		〃	上柳彦兵衛
	御畳方	伊阿弥宗順		塗・御蒔絵師	小村甚之助
元大工町	御烏帽子折	小渡左兵衛		〃	幸阿弥又五郎
	御膳御酒所	菊屋次左衛門		〃	家具屋七兵衛
	御櫛師	神村和泉		〃	石川甚右衛門
	笛ひちりき師	佐藤太郎左衛門		彫物師	横尾宗與
	墨所	大墨但馬		〃	次兵衛
	塗・御絵師	駒休意		鞍打	庄兵衛
	金銀打針師	庄兵衛		漆屋	庄三郎
	表具師	井上興庵		漆屋	つるのや久兵衛
	絵繕師	〃		医師	阿部長徳院法印
数寄屋町	呉服所	＊三島屋祐徳		〃	山田泰庵法眼
	畳師	次郎兵衛		御小道具小置物	万屋治郎兵衛
	表具師	伊藤宗仙		御献上物調達所	〃
	絵繕師	〃	上槇町	塗御蒔絵師	蓮池白助
	刀磨屋	松本十左衛門		〃	俵屋嘉吉
	御釜師	名越弥五郎		御酒所	高嶋弥兵衛
			中橋広小路	畳師	中村弥太夫
				笛ひちりき師	指田伝竹
				漆屋	五兵衛

「日本史資料総覧」・「江戸惣鹿子（元禄）」より抽出作成
＊明治５年数寄屋町となった三島屋屋敷（本文参照）

屋長意や上柳彦兵衛が居住している。また前述の後藤縫殿助はこのリストには記載されていない。多分，これは呉服町・西河岸町の町の枠外の拝領屋敷[9]であったためではなかろうか。もっとも，これらの公儀呉服所は元禄をピークに次第に衰退し，江戸中期以降，名のみの家居となってしまう[10]。

このほか，この町々には，烏帽子・櫛・小道具・小間物・笛・表具・刀磨・釜・彫物・絵・塗蒔絵など幕府御用達の諸工芸師が住んでいた。なかでも，塗蒔絵師は数多く，呉服町２，元大工町１，檜物町４，上槇町２，計９人も住んでいる。まさに，この界隈は幕府御用達の工芸師の集団的居住地でもあった。そして，これらはいずれも上方の工芸文化の象徴というべきもので，元禄期にこの文化の東漸が著しくみられたという証左でもある。これこそ，これまで取りあげてきた日本橋区の町々とは，本質的に異なるこの町の史的特徴といわなくてはなるまい。

しかし，こうした町の特徴は，時代を経て，次第に変化をみせ始める。それは，いうまでもなく，市中における町人需要の増大，大名屋敷地の拡大などにより，これらの工芸師は江戸城むけの職業

9)　『考証江戸切絵図』第５，p.146.
10)　「町人考見録」下（徳川時代『商業叢書第１』p.189）

表2　江戸後期町別店名

町名	店名	
西河岸町	具足	岩井与左衛門
	蠟問屋	大江屋半助
	薬種問屋	近江屋正三郎
	明樽問屋	下野屋新助
	餅菓子	小倉野
	菓子商	栄太郎
呉服町	能笛	中村宗光
	諸国銘茶問屋	大塚屋宗右衛門
	煙草問屋	湊屋善兵衛
	蠟燭問屋	伊勢屋勝次郎
	水油仲買	伊勢屋三九郎
	酒売店	常陸屋利兵衛
	醤油酢問屋	伊勢屋吉之助
	蒲焼	山形屋忠兵衛
	鮨	堺屋松五郎
	唐本	山形屋太兵衛
元大工町	書物問屋	泰山堂竹川藤兵衛
	蠟燭問屋	秋田屋治兵衛
	〃	大坂屋栄蔵
	小間物問屋	加賀屋徳兵衛
数寄屋町	薬種問屋	京屋善治郎
檜物町	医師	阿部長徳院
	〃	山田仙庵法眼
	〃	山田泰庵法眼
	狂言師	鷺仁右衛門
	糸物問屋	大黒屋忠兵衛
上槇町	餅屋	伊達や文太
	薬種商	吉川元順
	生蕎麦所	明月堂
	塗物問屋	橘屋信濃

岸井良衛『江戸・町づくし稿』より作成

生活から，多様な顧客相手のものに変わって，各町に分散移転をしていったからである。

事実，江戸時代後期には，表2のような各種の問屋の店がある町になっている。この表にあるリストは，岸井良衛の『江戸・町づくし稿』をもとにして作成したもので，これがすべての店ではないが，一応これによって，街並みの特徴的姿だけはうかがうことができよう。そこには，蠟燭・薬種・明樽・茶・煙草・水油・酒・醤油酢・塗物・書物などの問屋のほか，餅菓子・蕎麦・蒲焼・鮨などの飲食業の店をみる。もちろん，呉服町には，能笛の中村宗光，檜物町には狂言師鷺仁右衛門がおり，この町らしい一端をのぞかせるが，すでに述べた表1のような御用達商人や幕府お抱えの工芸師の名は記されていない。ただ檜物町の医師・阿部長徳院や山田泰庵がここに残っているのみである。その意味では，この町々は，日本橋の他の町と同様な街並みになったとみることができよう。

江戸時代の街並みについて，附記しておかねばならないのは，この町々の形が整然とできあがったのは，やはり元禄の頃であったということである。実際，寛文図では，呉服町は図1の（A）が1丁目，（B）と（C）のブロックが2丁目となっており，元大工町は南大工町の名で，同じように1丁目，2丁目となっているし，数寄屋町はなく，広小路として火除地の空き地になっていた。ここが数寄屋橋外の代地として数寄屋町が成立したのが元禄期であった。[11] もっとも享保図にあるように，これは西側だけで，東側のブロックは「おわり丁」とあり，これ以後に両側ともに数寄屋町と

11）『東京府志料』(1) p.115

なるのであった。また享保図では「おけ丁」と「かぢ丁」との間に南大工町ができたので，北大工町となり，更にその後，元大工町というに至る。もっとも，数寄屋町といっても，西側のブロック（A）の半分近くはずっと道寿屋敷や三島屋敷であったし、上槇町の（A）の一部西側には檜物町会所や上槇町会所屋敷があって，これが町に編入されたのは明治になってからである。

3．明治・大正期の街並み変貌

それでは，この町々は明治になってどのように変貌をとげたのであろうか。

ここでまず，この町々を含めた日本橋の界隈にとって大きな影響をなした時代の流れを記しておきたい。

その第１は，明治政府による欧化都市計画である。明治５年，新橋―横浜間に鉄道が開業して，開港場から鉄道が銀座のすぐ隣まできたし，築地に外国人居留地ができたなどから，それまで商業中心地日本橋の繁華街に遠く及ばぬ銀座が，俄かに首都建設のモデル地として登場する。周知のように，そこに欧化都市計画を象徴する煉瓦街建設が始まり，明治10年には，京橋以南の新しい街並みができあがった。もちろん，実際には，それは入居希望者も少なく，実を伴うものではなかったが[12]，この界隈をベースとする首都の壮大な欧州式街づくり計画が生まれるのであった。外務卿井上馨を推進者とする「官庁集中計画」の立案である。

これは，銀座に中央駅を置き，これを三角形の底辺とする左右の大通りを敷設して，それが交差する頂点から「日本大通り」を延ばし，皇居の濠に突き当たり，左に折れて，「国会大通り」とし，その正面に首相官邸と議長官邸，その真ん中に国会議事堂を造るという計画であった[13]。今日の官庁街霞ヶ関にあたる。

もっとも，これは井上の失脚と共に消えるが，明治21年，改めて，「東京市区改正条例」が公布される。これは「官庁集中計画」のような一部の欧風都市建築とは異なり，東京全体の都市計画を策定するものであった。それだけに実施にかなりの紆余曲折があり，明治30年代末に及ぶ。その結果，東京という都市のセンターは，日本橋から京橋・銀座に移り，特に行政センターは皇居の正面から左側の霞が関に移っていった。いわば，明治・大正期には，江戸時代と異なり，市中の中心が日本橋を点としていたものではなく，神田―日本橋―銀座―新橋の線上に置かれることとなるに至る。これは東京の商業地を考える上に重要な変化といえるであろう。

こうした変化の中で，更に呉服橋御門外西の部の町々に直接影響を与えた事態は，外濠内における土地の大変貌である。実際，そこにあった諸大名屋敷跡は，明治新政府の近衛陣営や歩兵第三連隊などの兵営と練兵場になったものの，大部分が荒れはてた野原となったといってよかった。すで

12）白石孝『日本橋界隈の問屋と街』p.78
13）三菱地所社史『丸の内百年のあゆみ』p.57

に，前述もしたが江戸時代でも，町々にとって，その地域が市場としての背景を持たなくなっていたものの，この広大な地域，約10万坪[14]が兵営，倉庫，輜重廠などで占められ，あとは草茫々の練兵場となっていたのでは，呉服橋の商業価値は無きに等しい。更に，重要な変化は，明治41年に工事が着手され，ここに大正3年に鉄道の東京駅ができたことである。外濠は依然として残されているし，その西側には鉄道がはしり，東京駅ができても，出口は丸の内側だけであったから，まさに日本橋側地区と丸の内側とは，鉄道と濠で二重に分断されてしまうのであった[15]。そして，丸の内側官有地は三菱に売却され，次第に新しい時代の殖産事業の進展センターとして発展することとなる。

もっとも，明治43年には，汐留より鉄道院の仮庁舎が呉服橋に移ったけれども，上記のような状況のもとでは，当該の町々にとっては，新しい時代の市場環境を享受できる条件を手にすることができなかったといってよかろう。

もちろん，市中の繁華街相互に結ぶ交通機関が，欧化の時代らしく，早くも登場する。明治15年の馬車鉄道で，新橋―日本橋，日本橋―上野，上野―浅草，そして浅草―新橋が漸次開業されるが，明治36年には電気鉄道となる。本稿冒頭にかかげた図1にもこれを記入してあるが，東京市に電気局が創立され，当時にこの電気鉄道を営業していた「東京鉄道株式会社」からこれを買収して，いわゆる「市電」となったのは，明治44年であった[16]。これは，どちらかというと封鎖的なこの町々を，京橋・日本橋と商業的に結びつける縫糸のような役割をはたすものであった。

これらの町々の明治における様相を総括的に描いたものに，『帝都復興区画整理誌』の一文がある。以下まずこれを略記引用してみよう。

「本地区は江戸時代已に整然たる街衢を形成し，更に明治10年及び明治40年の二回に市区改正を行いたるを以て，主要街路縦横に貫通し街路系統整然たり。殊に三方河川を以て囲繞せられるが故に，水陸共に交通至便にて本市商業の中枢を為せり。而して京橋方面より日本橋に至る電車通りは日本橋通りとして知られ，大商店・銀行・会社等櫛比して商業殷盛なり。呉服橋より千代田橋に至る通称呉服橋通りには銀行会社等の大建築物竝立せり。地区の東北部は兜町に隣接せるが為，株式関係者多し。元四日市町には乾物商多し，西南部の数寄屋町・檜物町方面には花柳街あり……」。

そこで，改めて，この町々の明治・大正期の街並みの特徴を詳しくみてみようと思う。表3はこの界隈6ヶ町にある店を業種別に，その数を記したものである。No.1からNo.8までは，下町によくみられる業種だが，それにしても，裁縫・仕立業（No.1），生花・茶道・長唄などの師匠（No.2），女髪結（No.3），傘・履物・小間物の店（No.4）が，他の日本橋下町に比べても，かなり多いことがわかろう。それは後述のようなこの町を色どる花柳街の故といえよう。No.9からNo.11は職人たちだが，江戸時代から考えるとNo.12，13の工芸師を含めて少ない。しかし，No.14の魚問

14）『東京市史稿 市街篇』第79によるとこの坪数は108,036坪とある。
15）岡本哲志「都市センターとしての丸の内の変遷」（前掲『江戸東京を読む』p.143）
16）東京都交通局『東京都交通局40年史』pp.7-24

表３　各町別主要商業・業種店数（大正７年）

No.	業種＼町名	西河岸町	呉服町	元大工町	数寄屋町	檜物町	上槇町	計
1	裁縫・仕立	1	5	6	2	5	7	26
2	生花・茶道・長唄等師匠	2	4	6	1	5	8	26
3	女髪結	0	4	4	1	3	7	19
4	傘・履物・小間物（和洋）	0	9	5	7	2	5	28
5	菓子（含む駄菓子）	1	6	2	3	2	5	19
6	印刷・出版	0	2	2	3	3	3	13
7	煙草・雑貨	2	3	1	3	4	4	17
8	医者	3	3	3	3	4	3	19
9	畳職人	0	1	0	0	1	0	2
10	大工職人	0	0	1	2	2	1	6
11	その他の職人	0	1	1	2	0	3	7
12	蒔絵師・絵師	0	1	0	2	0	0	3
13	縫箔師	1	0	0	2	1	1	5
14	魚問屋	0	9	1	0	0	0	10
15	芸者屋・待合	0	1	12	31	36	51	131
16	会社	0	13	5	0	4	1	23
17	料理・飲食	0	7	3	4	6	2	22

大正７年『日本各種営業者姓名録』より作成

屋が呉服町に集中的に９軒もあるのが，きわだっている。それは，品川町裏河岸に魚河岸関係の潮待茶屋や地方出荷の店があったが，そこの西河岸橋を渡ったところが西仲通りの北端で，呉服町であったから，この町に魚問屋があっても，「奥河岸の外郭地」として不思議ではないし[17]，そこにまた呉服町の特徴があったといってもよかろう。ただ，大正７年の『日本各種営業者姓名録』によると[18]，その魚問屋名は表４の如くであるが，明治31年及び33年の『日本商工営業録』などには記載がないので，明治期において，同様の名があったかどうか，魚市場との関係を示す資料[19]にも確かめるすべもない。

更に，これらの町々を業種別にみると，表３のNo.15のような芸者屋・待合が著しく多い。前述の『帝都復興区画整理誌』の文面にあるような花柳街があったことによるが，その数は元大工町から南にゆく程多く，数寄屋町31，檜物町36，上槇町にいたっては51軒を数える。界隈合計では，131軒の多きに達する。

『新撰東京名所図会』によれば，「この辺りの歌妓を総称して『日本橋芸妓』と称す。旧各藩御留守居の会同と同地の魚市場の魚商を目的としてできた聚落で繁栄を極む」とあるが，岸井良衛は

17）尾村幸三郎『日本橋魚河岸物語』p.112
18）啓新社『日本各種営業者姓名録』大正７年による。
19）魚河岸百年編纂委員会『魚河岸百年史』

表4　魚問屋名　（大正7年）

町名番地		業者名
呉服町	9	井上安太郎（松安）
	14	宇田川大次郎
	15	鈴木亀次郎
	〃	森山浅次郎（米信）
	〃	岩田　寅吉（岩定）
	18	斉藤市太郎
	19	田中仙太郎（鯉仙）
	26	伊藤　丑松（大寿）
	31	三浦　峰吉（寿賀峰）
元大工町	8	大塚　　実（米留）

表3と資料出所同じ

表5　町別芸妓屋・待合軒数（大正7年）

町名番地		芸妓屋	待合
呉服町		—	1
元大工町	1～5	6	1
	6～15	5	—
数寄屋町	1～8	17	4
	9～19	10	—
檜物町	1～6	11	5
	13～18	3	1
	19～26	12	4
上槇町	1～3	16	6
	4～7	10	2
	8～13	1	2
	14～21	14	—
計		105	26

資料表3と同じ

『江戸の町』で，日本橋の芸者というものは，はっきりしたことはわからないが，文化の頃には，日本橋の北，駿河町附近に多くいたのが，だんだんと南に寄ってきて，明治25年頃には，北は姿を消して，日本橋芸者といえば，南の数寄屋町が代表するようになってしまったという[20]。田中閑水も，「元大工町・数寄屋町・檜物町・上槇町は芸者やまちで，どの横丁も路地も芸者屋・待合・料理屋がひしめいていた。……夜晝にかかわらず，仕込みっ子のけいこ三味線の音か声が絶えず，どこかの路地内から聞えていた」という[21]。

今，このような花柳街を，町別に地番毎に軒数をかかげると，表5のようである。これを図1の地番に照応させると，その70％以上が，西仲通りの西側，即ち外濠側のAブロックにあったことになる。

かくして，この町々には，裁縫・仕立，生花・茶道・長唄などの稽古場や，女髪結，小間物屋など表3のNo.1からNo.4までの業種，また多くの菓子商の店，そしてNo.17の料理・飲食店がみられるのであった。

しかし，この中心をなす花柳街の繁昌も，確かに明治期における兜町や魚市場などが近くある故としても，やはり，そこには明治末より大正の，特に大正4年よりの大戦景気がその背景にあったといわなければなるまい。事実，この界隈の街並みは，このような時代背景を最もよく反映したものであった。これを示すものに，この町々にみる諸会社がある。表6がその主な会社名である。

この中で，特に4つの業種・会社について記しておきたいと思う。

20）岸井良衛『江戸の町』pp.63-64，及び『女芸者の時代』p.271
21）田中閑水『日本橋界隈歩記』17，pp.5-6

表６　各町所在会社名（大正７年）

町名番地	会社名	町名番地	会社名
呉服町　1	朝鮮銀行（支）	元大工町　10	小田原瓦斯（出）
〃	東京建物		上田瓦斯（出）
6	東海銀行		東京信託
10	塩水港製糖拓殖（出）		内田貯金銀行
〃	台湾海陸産業（出）		日本徴兵共生保険
〃	打狗整地（出）	檜物町　6	共同生命保険
〃	南昌洋行	12	千代田火災保険
14	丁酉銀行（支）	13	川崎貯蓄銀行
16	帝国生命保険	14	川崎銀行
22	山下合名	上槇町　1	日本活動写真
	山下汽船	〃	台湾糖業連合会
	奔別炭鉱	20	日本毛織物（支）
	福島炭鉱		
32	帝国火災保険		

（支）＝支店，（出）＝出張所
原資料　表３・４・５と同じ

その第１は，もちろん，銀行である。明治には国立銀行設置以来，数多くの私立銀行が出現した。呉服町６の東海銀行は，宇都宮の豪商で元浜町で佐野屋という呉服商であった菊池長四郎[22]を頭取とし，明治22年に堀江町１丁目に設立されて，明治36年にここに移転してきた銀行である。特に，明治42年に建てた欧米式の新社屋はきわだっていたという。同じこの町の14番地には「丁酉銀行」があった。発起人には池田政章，浅野長勲，井伊直憲など旧大名の華族が名を連ね，明治30年に設立し，本店は京橋の宗十郎町であるが，明治32年に通り１丁目に支店を設置，市区改正により明治41年に呉服町に転じたものであった[23]。更に檜物町には川崎貯蓄銀行と川崎銀行がある。いずれも，周知のように川崎一族の経営で，明治13年に普通銀行条例によって設立されたものであった。

第２はこの界隈に多くみられた生命・火災保険の諸会社である。明治後期は，これらの保険会社の勃興・発展期であった。呉服町16番地の帝国生命保険株式会社は，堀留町で明治21年に設立されたが，同35年にここに移転してきたもので，創立者は医師高木兼実，社長は銀座の薬種商（資生堂）の福原有信（明治31～33年）であったが，明治生命に次ぐ古い創立である。生命保険の発芽は早く明治前期で，これに初めて挑戦したのが，明治・帝国・日本の三大会社であった。しかし，明治20年中頃になるや，その数は増加し，明治28年頃には40社をも数えるに至り，激しい競争の中で淘汰されてしまう[24]。帝国生命保険（株）は堅実な五大生命保険会社の１つであった。檜物町６番地の共同生命保険会社は明治27年設立の広島の国民生命保険会社が，大正２年に東京に進出したもの

22）白石孝『日本橋街並み商業史』p.221
23）『大日本銀行会社沿革史』前編 p.37
24）『明治大正史　10　会社編』p.20

で，社名を改称し，檜物町が本店，広島が支部となった。またこの町の12番地には，千代田火災保険株式会社があった。大正元年の創立である。

第3は台湾関係の諸会社である。これこそまた明治―大正の時代の産業を象徴するものといえる。日清戦争後，台湾が領有されてから，当地の産業開発が急速に進むが，なかでも台湾における製糖業は大発展を遂げる。明治29年に大日本製糖が，33年には台湾製糖が，39年には明治製糖の諸会社が設立された。この中で台湾製糖会社は政府の保護の下で，三井，毛利その他の有力な資本家により創設される。上槇町1番地であった。しかし，日露戦争後にはこの種の事業会社の新設が相次ぎ45社にも及び，台湾製糖会社は南昌製糖，神戸精糖，名古精糖を買収合併することになるが，大正期，大戦中に製糖産業は競争激化もあって，群小会社は続々と大会社に合併するに至る。表6の呉服町10番地にある塩水港製糖拓殖会社も台東拓殖精糖と塩水港製糖の合併会社にほかならない。[25] また表の上槇町1番地の台湾糖業連合会というのは，台湾における分密粗糖製造会社や個人の会社の協議会で，明治43年に設立，生産の割当，汽船会社との運賃協定や価格協定を行うものであった。なお呉服町10番地にある打狗整地や南昌洋行などの会社が台湾の地元会社であることはいうまでもない。

第4の諸会社として，呉服町22番地の山下汽船グループをあげなければなるまい。それは明治期における海運業の発展と激しい盛衰を象徴する会社である。

そのほか安田系で不動産会社のはしりともなる東京建物が呉服町1番地に，また異色のものとして上槇町1番地には大正元年設立の日本活動写真会社などがみられる。

こうして，明治・大正期のこの界隈の街並みは，すでに述べたように，魚問屋があったり，芸妓屋・待合のような花柳街のある下町とみられがちだが，表6のような明治・大正の時代を象徴するような諸会社のある町々でもあり，いわば丸の内ができ上がる前のビジネス・センターのような色彩をも持っていたといわなければなるまい。ここにこの町々の大きな特徴をみるのであった。

4.　明治・大正期の地主と商業価値

この界隈の街並みを更に特徴づけていたのは，この町の土地所有者でもあった。少なくとも，明治になって，この町の商業的価値は見直されていたことは事実である。それだけに，明治に富商となった者の，この地への資本投下も盛んだったといえる。明治6年の『沽券図』をみても，そこに出てくる地主の名は，いずれも，当時の富商や資産家たちである。もちろん，明治という新しい時代の中で，これらの地主の名は変動する。しかし，明治末年のそれをみると，やはり伝統的な富商や資産家が大半を占めているといってよい。

---

25)　土方成美『日本経済研究』pp.708-710

表７　各町の主要地主の職業別リスト（明治45年）

No.	氏名	住所	所有地	所有坪数
1	福島弥兵衛	本所・緑町	西河岸町12	74.69
2	鳥居甚右衛門	日本橋・数寄屋町	数寄屋町5,8	344.98
3	村越庄兵衛	〃　〃	数寄屋町18,19	205.10
4	石崎政蔵	本郷・湯島	檜物町2	223.86
5	安井治兵衛	浅草・福富	檜物町7	243.30
6	原くら	日本橋・本石町	檜物町8	113.20
7	鈴木嘉七	京橋・築地	上槇町4,5	597.72
8	八木コウ	芝・桜田	上槇町11,13	430.90
9	柏原孫左衛門	京都・左京区	西河岸町１	98.35
10	建石今	日本橋・長谷川町	西河岸町14	74.69
11	中野要蔵	〃　呉服町	呉服町22,23,24	353.48
12	菊池長四郎	〃　元浜町	呉服町33	123.27
13	鈴木宗兵衛	〃　元大工町	元大工３	273.68
14	柿沼谷蔵	〃　小網町	檜物町21,22	248.94
15	堀越角次郎	〃　通旅籠町	呉服町26,27,28,29,30,31	922.70
16	石原萬助	〃　小舟町	西河岸町13,16	188.88
17	高津伊兵衛	〃　瀬戸物町	呉服町18,元大工町1	685.53
18	米倉嘉兵衛	〃　本船町	元大工町6,8	347.38
19	窪田秀吉	日本橋・室町	元大工町12	134.23
20	渡辺東一郎	〃　青物町	数寄屋町１	466.87
21	服部吉兵衛	〃　堀江町	西河岸町６	108.11
22	松島鐸三	神田・東松下町	呉服町17,元大工町14,15	306.02
23	後藤長左衛門	日本橋・本町	元大工町7,9	346.22
24	星野与兵衛	〃　伊勢町	檜物町１	275.80
25	中井新右衛門	〃　金吹町	西河岸町17,呉服町1,2,3,4,5,10,数寄屋町3,6	1939.51
26	鹿島千代	京橋・銀座	呉服町9,10,檜物町6,19	887.93
27	鹿島のぶ	〃　四日市	元大工町13	259.80
28	中沢春吉	〃　南新堀町	数寄屋町14	148.52
29	外池宇平	日本橋通２	呉服町11,15	391.59
30	鹿島金一郎	〃　〃	数寄屋町12	88.22
31	三枝代三郎	京橋・銀座	檜物町10,11	225.50
32	太田はなえ	深川・島崎	呉服町21	293.15
33	若林七五郎	本所・菊川	呉服町32	120.48
34	小林弥兵衛	日本橋・小舟町	呉服町９	171.100
35	細田安兵衛	日本橋・西河岸	西河岸町２	67.18

明45年『地籍台帳』より作成，職業・坪数は筆者調べ

これを銀行や保険などの会社を除いて業種的に主な地主をみると，質商，呉服織物問屋，酒問屋や小間物，材木商などが多い。これらの多い業種の地主たちを抽出すると，表７の如くである。これは明治45年の地籍台帳によるもので，この界隈の町々に持っている土地の町名・地番と所有坪数を記しておいた。

やはり業種として，ひときわめだっていたのは質商である。表のNo.1からNo.8まで８名があげられる。この中で，鳥居甚右衛門（No.2）と村越庄兵衛（No.3）は店を数寄屋町内にかまえていて，鳥居が5，8番地344.98坪，村越は18，19番地205.10坪を所有していた。いわば，この町の質店といえる。またNo.7の築地の質商・鈴木嘉七は上槇町の土地597.72坪を持ち，芝・桜田の八木コウも，この地に430.90坪を持っていた。いずれも花柳街地である。しかし，この質商グループの中でも，福島弥兵衛（No.1），石崎政蔵（No.4），安井治兵衛（No.5）及び原くら（No.6）は質商としても大きく，東京市内各地に多くの土地を所有していたのであった。表８は，表７の地主中，土地所有からみた大資産家リストである。事実，福島は東京に25ヶ所，日本橋区だけでも６ヶ所，所有地総坪数は，12,293坪，石崎は東京10ヶ所，内日本橋区に蠣殻町と檜物町２ヶ所で14,229坪の土地の所有，安井は東京市内に実に45ヶ所，内日本橋区に３ヶ所，13,711坪を，また本石町の質商原くらは，東京市内に19ヶ所，内日本橋区５ヶ所で合計13,690坪を所有していたのであった。このように質商が広い土地を所有していた理由は，前にも拙稿で述べたことがあるが[26]，当時の質商というのが，

26）白石孝「日本橋浜町１丁目街並み商業史覚書」三田商学研究43の４，p.29

表8　〔表7〕の地主中，土地所有からみた大資産家リスト（2000坪以上所有者）

表7 No.	氏　名	東京市内土地所有地数	日本橋内土地所有地数	所有地総坪数	表7 No.	氏　名	東京市内土地所有地数	日本橋内土地所有地数	所有地総坪数
1	福島弥兵衛	25	6	12,293	21	服部吉兵衛	13	7	2,123
4	石崎政蔵	10	2	14,229	23	後藤長左衛門	17	11	4,411
5	安井治兵衛	45	3	13,711	24	星野与兵衛	24	12	5,586
6	原くら	19	5	13,690	25	中井新右衛門	35	12	12,806
7	鈴木嘉七	5	3	2,225	26	鹿島千代	49	20	19,094
10	建石今	44	15	22,379	27	鹿島のぶ	46	10	15,300
12	菊池長四郎	22	8	8,059	28	中沢春吉	17	1	3,639
14	柿沼谷蔵	9	5	3,563	29	外池宇平	7	5	3,420
15	堀越角次郎	49	6	74,428	32	太田はなえ	22	5	9,591
16	石原萬助	18	7	2,860	33	若林七五郎	24	3	17,267
17	高津伊兵衛	30	11	18,783	34	小林弥兵衛	19	3	8,706
20	渡辺東一郎	14	10	3,346	35	細田安兵衛	10	1	2,536

原資料　表7と同じ

その質屋収益を土地の取得にふりむけ，これからの地代収入で，更に質貸付資金の増大を計っていたことによるものであった。そして，表7のように，これらの質商は福島弥兵衛を除いて，数寄屋町，檜物町，上槇町に土地を取得していた。

これに対して，地主の第2のグループは，糸，木綿，呉服，織物のような繊維の問屋で，表のNo.9からNo.15までの7名であり，その大部分は，西河岸町や呉服町の土地を取得していた。この中で町に店を持っていたのは，No.11の中野要蔵（呉服町・洋織物商）と，No.13の鈴木宗兵衛（元大工町・織物商）で，他の5名は，明治期を代表する富商・資産家たちであった。No.10の建石今は長谷川町の木綿問屋で，表8のように，東京市内に実に44ヶ所，内日本橋区に15ヶ所，合計坪数22,379坪の突出した大地主でもあった。No.12の菊池長四郎は宇都宮の豪商で元浜町の呉服問屋であると同時に，呉服町6番地の「東海銀行」の頭取であった。表8のように，東京市内に22ヶ所，内日本橋区8ヶ所，8,059坪の土地所有者である。No.15の堀越角次郎は明治の時代を代表する桁外れの資産家である。江戸末期からの通旅籠町の木綿問屋であったが，この時期には資産運用の投資会社といってよかった。実際，表8のように，東京市内に49ヶ所，内日本橋区内に6ヶ所で，所有した土地の総坪数は，実に74,428坪にも及ぶ。これについては，すでに拙著でも詳しく記述してあるので，これを参照されたい。[27)]

第3のグループは，多様な海産物・鰹節，鮮魚関係の問屋達である。No.16の石原萬助は小舟町の海産物問屋で，すでに述べたように，市場と関係の深い西河岸町の土地を持っていたし，No.17の高津伊兵衛は江戸時代からの鰹節の老舗で，瀬戸物町に店をかまえる富商の1人であるが，表8

27)　白石孝『日本橋堀留・東京織物問屋史考』及び『江戸明治大正史・日本橋界隈の問屋と街』

のように，各地の土地を取得し，東京市内に30ヶ所，内日本橋区に11ヶ所，計18,783坪の土地を所有していた。高津伊兵衛（にんべん）については拙著『日本橋街並み商業史』に詳しい。

第4のグループはNo.21からNo.24までの薬種問屋である。堀江町の服部吉兵衛，本町の後藤長左衛門，伊勢町の星野与兵衛のほか，神田の松島鐸三などがそれである。しかし，これらは土地所有者としては中位だが，表8のように，日本橋区内における土地所有が大半であるのが特徴といえる。

第5のグループはNo.25からNo.28までの酒問屋としての富商たちで，中沢春吉は別として，いずれも1万坪以上を東京市内に所有しているので知られる大地主である。なかでも，中井新右衛門は金吹町の富商で，中井銀行の創立者であり，明治の時代の商業史を代表する存在といってよい。この中井は東京市内に12,806坪，35ヶ所の土地を持ち，日本橋区には12ヶ所を所有していたが，表7のように，西河岸町1ヶ所，数寄屋町2ヶ所のほか，呉服町に6ヶ所も土地を持っていたから，日本橋区内での所有土地は，ほぼここに集中していたといわなければならない。

第6のグループは通2丁目や銀座の小間物問屋たちであった。いわば，日本橋通りといわれる大通りの店で，外池宇平は周知の老舗「柳屋外池家」である。これは，表8にあるように，東京市内に7ヶ所，内日本橋区に5ヶ所，計3,420 坪を所有しているが，この中の呉服町11番地には，大正7年には薬種商「太田胃散本舗」が店をかまえる。なお柳屋についての史的資料を解析したものに鈴木理生の近著がある。[28)]

第7のグループはNo.32と33にある材木問屋，太田はなえと若林七五郎である。いずれも，かなりの土地を東京市内に持っていたが，特に若林七五郎は17,267坪にも及ぶ。

これらの業種グループ以外に，No.34に小舟町の砂糖問屋小林弥兵衛と，No.35として西河岸町の菓子商で今日も老舗としてある榮太樓の細田安兵衛を加えておいた。何故ならば，小林弥兵衛は表8のように合計8,706坪を東京市内19ヶ所に土地を持っていたし，表6のように，このあたりに台湾の製糖会社がその出張所を設けているのと無関係ではないと思われるからである。また細田安兵衛は西河岸町に店の土地を持ち，67.18坪とあるものの，表8のように，日本橋区以外に9ヶ所，計2,536坪を所有していた明治の老舗であった故である。

それでは，このような地主たちは，どの町の土地に投資をしたのであろうか。表7から算出すると，延数で，西河岸町7，呉服町16，元大工町6，数寄屋町5，檜物町7，上槇町2というように，その半数が西河岸町と呉服町に集中しており，特に呉服町が圧倒的に多い。これに対して，上槇町はわずかに2ヶ所にしかすぎない。それは，7・8表に示した市内の，特に日本橋区の資産家たちのみた町々の商業的価値を示しているといえるかも知れない。

そこで，この界隈の町々の大正4年頃の平均地価をみてみよう。表9は100 坪当たりの町の平均

28) 鈴木理生『江戸商家と地所』pp.182-186，pp.205-209

表9　各町の地価（大正4年）

町　名	100坪 地価平均
通　1　丁　目	8902円
2　丁　目	6695
3　丁　目	6588
4　丁　目	6031
西　河　岸　町	3251
呉　　服　　町	3089
元　大　工　町	2573
数　寄　屋　町	2538
檜　　物　　町	2284
上　　槇　　町	2523

『日本橋区史』各町土地台帳より算出

地価比較である。これが町の商業的価値を絶対的に物語るものでもないし，町内の場所によっても異なるのはいうまでもないが，少なくとも次のような町の姿を物語っているといえよう。第1は，通町筋の町々，つまり表大通りに面した町々と比べて，これまでみてきた6つの町の地価は2分の1以下であるという較差を示していたこと，第2はどちらの界隈にもいえるが，日本橋に近い北に高く，南にゆくにつれ安くなっていること，第3に同じ傾向の中で，檜物町が低く評価されていることである。それはこの一帯の町々には全くみられなかった100坪当たり地価2,200円の低評価のところが（20番地から25番地）あったからである。ここは図1の同町A地区で花柳街である。そして，上槇町より低評価されたのも，町の発展力の違いによるものといえる。これを人口の増加からみたのが表10である。もちろん，これで町々の発展力を絶対的に測り得ないとしても，明治から大正期にかけての町の拡大の相対比較にはなろうかと思う。殊に，元大工町や数寄屋町，上槇町と比して，その増加率が低いのが注目される。そして，西河岸町や呉服町とこれら4つの町の男女の数の違い

表10　町々の男女人口増加

町　名	明治16年			大正2年			増減%		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
西河岸町	358	282	640	404	302	706	12.8	0.7	10.3
呉服町	706	689	1395	910	652	1562	28.8	△0.5	14.0
元大工町	353	403	756	471	496	967	33.4	23.0	27.9
数寄屋町	351	392	743	508	617	1125	44.7	57.3	51.6
檜物町	556	555	1111	664	650	1314	19.4	17.1	18.2
上槇町	622	522	1144	780	894	1674	25.4	17.1	46.3

原資料『日本橋区史』による。増減筆者

に，町々のすでに述べた街並みの特徴が物語られているといえよう。

こうして，大正期のこの界隈の街並みは，日本橋通りの町々と異なる下町的様相と後の丸の内にみる会社のオフィス・センター的様相とが混在したものとなっていった。その意味で，他の日本橋区内の町々とは，かなり異なる史的特徴をもっていたといわなければならない。